



ぜんこくのうぎやうぎやうどうくみ あいちゅうおうかい ちようしょう
全国農業協同組合中央会会長賞

文字を書かない文通

千葉県柏市立光ヶ丘中学校三年

廣瀬 美紀

「行ってきます。」
私は重いラケットバックを背負い、学校へと向かっていった。その日は約二年半続けてきた部活の、最後の一日練習の日だった。そして「最後の部活弁当の日」でもあった。

その日のお弁当は、おにぎり二つとおかずが少し。いつもと変わらぬ組み合わせだった。お母さんは部活の弁当と言うと、決まってこのスタイルの弁当を作ってくれていた。今はこのおにぎり二つとおかずが少し、というスタイルを気に入っているものの、まだ部活に入ってまもなくだったあのころは、このスタイルが嫌で嫌でたまらなかった。

他の子はサンドイッチやおしゃれなおにぎりなど、かわいいくておいしそうなお弁当だったのに、私は中に梅干しが入っただけの地味なおにぎり。それがただひたすら恥ずかしかったのだ。そしてつい「なんであんな地味なお弁当を作るの。」とお母さんに怒鳴ってしまった。後悔先立たず。それから母は弁当を作ってくれなくなった。しかたなく私は、ずっとコンビニのパンを買って食べていた。

すると、何日か経ったある大会の日の朝、起きるとひさしぶりに弁当を作る母の姿があった。驚いてしばらく立ち尽くしている。「運動しているのにコンビニのパンなんてありえない。あんたは見た目で判断してるけどね、梅干しは熱中病予防になるし、パンよりもお米の方がエネルギーになりやすいんだから。」

と言ってきた。そのとき、私は感謝と罪悪感で涙があふれて止まらなかつた。ここまで考えてこのおにぎりを作ってくれていた。なのに私は。そう思うと、見映えだけを気にしてお母さんを傷つけてしまった自分に腹

が立った。そんなひどいことを私はしてしまったのに、今、母は忙しくて応援に行けない分、前のようにおにぎり私の体をサポートしようとしてくれていた。

今改めて考えてみると、このおにぎりじゃなければここまで部活を続けられなかったかもしれない。どんなときも、このおにぎりは思い出のワンシーンに登場してくる。悔し涙を流した日、みんなを抱き合せて喜んだ日、雨の日、暑かった日、寒かった日。過酷な練習を乗り越えられたのも、あのおにぎりの目には見えない栄養素達が私の体を支えてくれたから。そして、たくさん込められたお母さんのパワーをもらっていたから。まるで、お母さんの分身かのようにそばにいてくれた。

だけどそれだけじゃなかった。もちろんあのおにぎりは不器用で気持ちを伝えるのが下手くそな母からの精一杯のエールだった。逆に、反抗期で照れくさい私からも、ラップをきれいにたたんでキッチンに置いておくことが、精一杯の感謝の表し方だった。このやりとりは、お互いに意地っぱりで素直になれない母と子同士の文字を書かない文通だった。あのおにぎりがなければ部活を続けられていなかったかもしれないという以前に、母子のコミュニケーションを保つ上でのかげがえのない存在だった。

部活を引退してから早くも半月が過ぎた今、あの部活弁当は受験弁当へと変えられた。今年の夏から塾に行き始めた私にとって、慣れない中でたくさんの課題をこなすのは大変どころの問題ではなかった。その分ストレスで母にやつ当たりしてしまったこともある。だけど、今は母も大変さを受け入れて、私の怒りが収まるまでつき合ってくれる。そして、塾のお弁当もかかさず作ってくれる。

あのおにぎりは相変わらずで、塾でも「梅ってしぶいね。」

って少し笑われる。だけど今は、胸を張って「私は梅が好きなんだ。」

ってはつきり言える。あのおにぎりは、お母さんと私を少し変えてくれたような気がする。